

麻布と山倉様の信仰



やまくらさま やまくらだいじん かんぶくじ
山倉様は「山倉大神」、「観福寺」

という神社とお寺の総称です。千葉県香取市山倉にあり、古来より疫病除け、病気治しの神様として有名です。弘仁二年(811)の創建と伝わり、江戸期より地元周辺から北関東を中

心に信仰域を広げ、明治大正期には東京・横浜で爆発的に流行しました。山間にありながら、大正時代には成田山新勝寺と並び称されるほどに崇敬者を集めたと言われています。そんな山倉様と麻布周辺、十番稻荷神社には意外な接点があり、戦前までは特別な関係となっていました。今回はそんな埋もれた歴史をご紹介します。

山倉様は大六天を祀っていました。大六天魔王(第六天)は仏教の修行を妨げたり、織田信長が自称したことなどが有名ですが、強大な力を持つとされており、民衆からは災難を退ける神様として信仰されてきました。その総本宮とされるのが山倉様なのです。

御祭礼の時期には、竜宮より神様へのお供えとして、近くの栗山川へ鮭が遡上してきたと言われ、今でもご神前に鮭をお供えする「鮭祭り」が行われています(自然環境の変化などから、現在では鮭の遡上は難しくなっているようです)。

明治になって大六天を祀っていたお宮は「山倉大神」と名を改め、御祭神の御名前も変更、別当寺(管理していたお寺)の「観福寺」では元々の大六天の御本尊を迎え、別々に活動することとなったのですが、双方が山倉様として信仰されることになります。明治になってから急速に崇敬者が増えた事については、コレラという新しい感染症を防ぐためや、交通が発達したこと等が要因として考えられます。

麻布には先ず観福寺が拠点を築きました。麻布十番大通りから南山小学校へ行く入り口に急坂がありますが、その辺りにお寺の教会所を建てたのです。この小高い山一帯を俗に「内田山」と呼びますが、これは江戸期に小見川藩内田家の屋敷があった事に由来しています。実は、江戸時代から内田家では邸内社として山倉様をお祀りしていたのです。それを発展させたのですね。明治後期には大六天の縁日が開かれていた記録が残っています。

一方、山倉大神では竹長稻荷神社(十番稻荷神社の前身)に遙拝所を設けていました。明治三十年代からと考えられます。遙拝所となった理由について、直接的な史料はないのですが、竹長稻荷神社の氏子総代が奉納に関わったと見られる狛犬が山倉大神に残っています(明治32年奉納)。山倉様では病氣治しの薬として「鮭の黒焼き」を授与していましたが、東京では竹長稻荷神社でだけ受けることができたということです。

こうして、東京・横浜に信仰を広げた中でも、麻布は山倉様にとって特別な地となったのです。しかし、昭和に入って信仰していた人々の高齢化や、発達したとは言え不便であった交通などから次第に参拝者は減少していきます。麻布では戦争末期に十番一帯が爆撃を受け、観福寺の教会所と竹長稻荷神社は焼失。教会所は再建されず、竹長稻荷神社は末廣神社と合併し、遙拝所は無くなってしまいました。そして、麻布の人々の記憶から次第に消えて行ってしまったのです。

しかし、山倉大神には麻布を含め各方面から奉納された物が今現在でも残っています。麻布との関係は完全に歴史に埋もれてしまった訳では無く、昔時を偲ぶよすがとして山倉大神の境内に見ることができます。